

# 年表で読む

## 古平の歴史

《13》

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第一〇五号(二日発行)  
平成十年六月一日

### ■開拓使が置かれる

なにもかも新しく変わって明治新政府ができ、蝦夷地の開拓をめざして開拓使が置かれたのが明治二年七月八日で、北海道と命名されたのが同年八月十五日のことです。

しかし、日本で現在使われている暦(新暦)になったのは明治六年元日からなので、この時の日付けは旧暦です。これを新暦になおしますと、

開拓使の設置 八月十五日  
北海道と命名 九月二十日  
となります。

### ■札幌に開拓使庁

新政府には六つの省と三つの使が設けられて、その中に開拓使が置かれたというものの、役所は東京芝の増上寺にありま

した。

古平は、古平郡として開拓使の直轄地(親領地)となり、銭函仮役所の治めるところとなりましたが、明治三年、チヨペタ川河口にあった古平本陣に古平開拓出張所が置かれることになりました。

同年、銭函仮役所が廃止になり小樽仮役所が置かれると、古平はその管轄下に入るようになりましたが、小樽仮役所が廃止になると、同五年、再び直轄地となりました。

明治四年五月、札幌に開拓使庁舎が出来て開拓使が札幌に移ってから、いよいよ北海道開拓の事業が本格化してきました。

### ■種田家が場所請負い

百五十年にもわたって古平場

所を請負い、莫大な富を築いた岡田家ですが慶応二年(一八六〇)、十一代・岡田八十治のときに、種田徳之丞ほか二人に古平場所を譲り渡すことになりました。その後の古平の経済や文化の面に大きな影響を残した、種田家一族の名前がここに初めて出てきます。

### ■場所請負人の廃止

古平が開拓使の直轄地(親領地)となったのは、漁業が盛んで税収が多く上がり、ぼう大な開拓費用をまかなうために重要な土地のひとつであったからです。また、北海道沿岸には場所請負人がいて利益をほとんどひとり占めにし、アイヌを酷使した上、和人の漁業の発展にとっても妨げになるばかりか、新しい北海道の発展にそぐわないものでした。

そこで明治二年、開拓使はいくつかの施策の中で「場所請負人の廃止」を決めました。この突然の廃止の通知に請負人たちは死活問題だと大騒ぎになり、西海岸の請負人は早速開拓使に陳情書を出しました。

### ■「本陣」の名の起こり

請負人たちの反対があり、急に廃止することは混乱もあると考えられるので、開拓使はその後、幾分ゆるめた条件でさらに通知を出しました。

「請負人はすでに廃止と決まったので、当分の間、漁場持ちという名前にする。そのほかのことは今まで通りにする」というものでした。

しかし開拓使はその年の十一月、次の十三郡に請負人廃止の命令を出しました。

古平・美国・歌棄・寿都・余市・古宇・岩内・忍路・島牧・積丹・増毛・浜益・厚田

そして、請負人から出されたいくつかの伺いの内、

・運上家という名前は、これからはすべて本陣ということ  
・そこに番屋があるときは、脇本陣という

現在も町名として残っている本陣という名前は、こうして名付けられたものなのです。



瞑想し

亡夫の特技

渡辺 ハツ エ

人間だれでも、大なり小なり取り柄はあるのではと思われま

す。私の亡夫も、ちよっぴり家庭に役立つものを作るといふ取り柄がありました。それは些細なことですが、廃物を利用して家庭の必需品を作ることでした。

「好きこそもの上手なれ」と言われてますが、まさに亡夫はそうでした。

お金の換算すると微々たる事ですが、長年家計には結構プラスになったのでは思っております。何か考えている時は、私にはなんとなくわかります。どんな小さな物でも完成した時はとてもうれしそうで、私も自分のことのようにうれしかったものでした。

自分の乗っていた魚舟にもいろいろとアイデアを取り入れては、仕事が仕易くなった、便利

になったと言つて喜んでいたものでした。

当時、わが家の新聞受けは表通りから反対側の玄関にありました。冬になると、「新聞屋さん大変だなあ」といつも気にかけていました。ある日、船揚場に流れ着いていたポリ容器を手に入れました。これは夫の構想

若葉が萌えて、今年もまた春の運動会がやってきました。ふと、昔の運動会のことを思い出し、そのことを書いてみたいと思います。

まず、一番先に気になるのはお天気のことです。天気具合が心配ないと次は場所取りです。昔は生徒の数も多く、また

で新聞受けに変わりました。入れ口には蝶番(ちまがひ)を使つてふたも付けましたので、これで便利になりました。早速、勝手口の横にある灯油タンクに取り付けました。

「これで配達時間がぐっと短縮されるだろう」と、とてもご満悦のようでした。

そのころは中学生が配達して登校前の貴重な時間でしたから、中学生を思いやる亡夫の心遣いであつたのでは、と私は思っています。

「特許権でもとれそうなもので

も作つてつてくれたら、私の老後も安心——。」と、冗談を言つて亡夫をからかつていた當時をしのんでいるこのころです。

◆

競走、借物競走、むかで競走、玉入れ、札合わせなどがありました。男子は騎馬戦やせんべい割りのような勇ましいもの、女子は遊戯など。

競技が始まると、子どもよりも見ている父母の方が熱中して力が入り、中には子どもといつしよに走り出す親もいて笑いを誘い、とても今では考えられないほどの賑やかさでした。鉢巻きは赤と白と決まっています、賞品としてノートや鉛筆などを貰う子どもの表情も誇らしげでした。

競技中はみんな夢中ですが、いったん休憩になると、暑い日にはアイスクリーム屋さんの前には行列ができます。露店もたくさん出ていて、どこも子どもたちで賑っていました。

待ちに待ったお昼になると、ふだんとは違つて精一杯のご馳走(次ページ下段へ続く)

なつかしい運動会

竹内コト

家族がみんなで行きましたから、見物人も大変な数でした。始まるころにはもう座る場所もないほどです。多くの人は肩越しに立つて見なければなりません。新地方面から行く人たちは、リヤカーにお昼の弁当を積んで行ったものです。運動会の種目も徒

大正二年

4/5 先の田主人の消息がわからないので、懸賞金百円を出すことになった、困主人に頼まれて十四枚のピラを書く

4/7 群来村で大漁、崎長で一棹、△正で十五、六杯、刺網も大漁、崎長、△では一棹でまずは中漁、群来村へ行って見たが、山の上から見る湾内は賑やかである

4/8 鯨大漁、川尻から歌棄一帯で漁があり、十二、三杯から一棹、前浜は漁獲皆無、汽船が棹船を引いて湾内に入ってくる、妻は手伝いに行つて二もつこもらつて来る

4/9 朝からちらちら雪が降り寒かった、鯨漁は皆無、寂しいことだ

4/10 鯨大漁、沢江漁場から歌棄沖にかけ建網大々漁、少なくとも一棹から二棹、△は三か統で千石以上とか、近年稀な大漁、沖も陸も大漁旗を押し立て実に壮観である。前浜から入舟方面は寂しい、群来村も思わしくない、刺網

は中漁、今までの漁獲は二万二千石く三千石でこの近海では一番だ、△へ行つた伊三さんは鯨もつこに大漁手拭いをもらつて来た、凶歩方、○は四百石、沖村田畑、□、八反田、田岸はじめ一帯は大漁、崎長、△もとつた、とにかく古平の人は大喜びだ

4/11 沖村から湯内、余市方面も大漁、前浜方面がさっぱりなので気もめるだろ

高野名幸作さんの日記から



[6]

いている、新聞によれば余市や朝里、熊碓方面が大漁、小樽湾内は十八年ぶりの大漁とのこと、鯨場になれば人の元気がまるでちがう。

4/13 曇り空で寒い、前浜もとれると申し分ない大漁になるが、なかなか都合よくいかないようだ、もらつて来た鯨をつぶし、シリツナギをする、チラチラ雪が降り出して来たが昼ごろに終わる、午後

から困へ行く、電球を売りに来た人がいて話を聞く、電気とはなんと便利なものだ

4/14 鯨漁は群来村崎長歩方で四杯ほどとつたとのこと、沖揚げはすんだが陸の仕事が忙しい、△さんと組んで湯内の△から鯨を買った、数で受け取ることにしたが大分少なかった、これは大変と掛け合いに行つて来た

4/15 昨日の買鯨、今日つ

(前ページより続く)

走が並び、顔見知り同士だところとがまた親しみを増すのです。

今とちがうところは、運動会が終わるまで見物人は降りません。どの競技にも一生懸命拍手と声援をおくっていました。このころは我が子の出番が終わると、「もう関係ない」とばかりに帰るのでは、子どもたちが可哀想です。

私はずうっと学校の下で暮らしていましたが、いろいろな時間に行く人、帰る人を見てきました。昔のように、みんなで楽しめるような運動会はもう見られないのでしょうか。

キキキキキキキキキキキキキキキキ  
ぶし、シリツナギをし納屋に掛けた

4/16 快晴、本年の鯨場は珍しいナギ続きと天気まわりだ、近年にないよい年だ、前浜の歩方連中十七、八か統を除いていずれも大漁、それに手間取り連中も皆一人で三本以上掛けたので、市況も活気を覚える (つづく)



遙かなる故郷の思い出

[45]

『古平弁』の話

④

榎

義

春

「キックラセンキ」という方言は、古平をふくめあちこちで使われているようだが、「ギックリ腰」といえばどこでも通用する。疝気（せんき）病みは、漢方医学の本では腹や腰の病む病気となっている。

平成五年の夏、樺太戦没者遺骨収集に政府派遣団員として参加したときに、戦友会の北海道出身の仲間の一人が、いきなり「俺あ、キックラセンキになっってしまったデア」と言ったら、びつくりしたのは厚生省の役人で、

「橘さん、キックラセンキってなんですか。よく落語にも出てくる疝気病みのことですか。」と、きたもんだ。

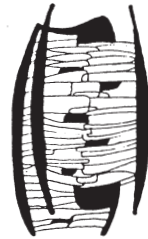
「いやいやそうではなく、北海道ではギックリ腰のことをキックラセンキというのですよ」

と言ったら、厚生省の役人も同行の医者も、「ところ変われば言葉も変わるものだ。」と、大笑いになった。

医者は、こんなサハリンの山の中で、もし疝気病みでもおき

素朴な味わいこそ珍味

福 井 幸 平



たらどうしよう、と思っただらしく、また、戦友のほうは穴があったら入りたい、というような顔をしていたが、ポツリと、「すつかだねえべき、これが北海道の標準語だべ」と、ひとこと――。

五十年代ころまでは大量の水揚げがあって、古平の経済を支えていたスケソも近ごろはさっぱり、それでも今年はやや漁があつて、値も良かったとか。

古い話になりますが、スケソが大漁していたそれも戦前のこと――。

スケソのことをシラミと言っ

てバカにして、われわれ貧乏人でも食べることはまずなかったようです。

スケソは棒干しにして、「メソタイ」といって当時の朝鮮・支那（中国）に輸出していたようで、古平では、あちこちの小川や雪解け水の中にスケソを入れ、それを足で踏んでからナヤ

（納屋）にかけ、寒風にさらして干していました。踏んでこなれた魚体は寒さで凍り、干し上がった時の身がやわやかくて味もよくなるということです。こんな風景はいたる所に見られたものです。また、町中の家々の軒下にも棒干しが下がっていて、これらは子どもたちのおやつ代わりになりました。

その後、かまぼこのすり身に加工されるようになり、用途も広がってきました。

また、今はすっかり高級品に格上げされてしまったタチなどは、もちろんほとんど食べなかつようでしたし、ただ一部の人でしたが珍味として賞味していたようでした。ただ、誰が考えたのかはわかりませんが、タチを煮てすり鉢ですり、塩、でんぷんを加えたタチのかまぼこなるものはよく作られ、季節の味としても重宝がられています。後に、石油缶（二十リットル）一杯いくら、という値で売買されていましたがこれは安いものでした。

（次ページ下段へ続く）

・もつけ<sup>レ</sup>カエル(青森、津軽)

歌葉町の海岸にある岩をむかしから、鯨場で使うモッコに似ているので「モッコ岩」といわれていますが、カエルにも似ています。それで、青森地方の方言から「モツケ岩」ではなかったのか? という人もおられます。

・もつこしよ<sup>レ</sup>モッコを背負う人、主に、船から鯨をモッコで背負って陸に揚げる仕事をする人

・モッコふんどし<sup>レ</sup>一枚の布ではなく、布の端にひもをつけた丁字型のふんどし

## 古平の方言

(15)

・もつちよ<sup>レ</sup>こい、もつちよがす<sup>レ</sup>くすぐた<sup>レ</sup>い、くすぐる

・もどりしなに<sup>レ</sup>帰りがけに、

「もどりしなに、これ持ってってけれ」

・ものもじ、ものもず<sup>レ</sup>物をたくさん持っている、金持ち

・ものもじ<sup>レ</sup>いい<sup>レ</sup>物を大事に使う、

・ももた<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>や動物の太もも

・もり、もり<sup>レ</sup>子守をする、子守

・もろはく、もろはく<sup>レ</sup>もろはく(諸白) 粕のことを略していう、上等の酒粕

・もんぐり、もぐり<sup>レ</sup>潜水夫

・もや<sup>レ</sup>霧(もや<sup>レ</sup>霧という漢字もあるが、ア  
イヌ語だという)

・もんび<sup>レ</sup>祝祭日、お祝の日、

・や<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>話を始める時にいう

「や<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>しばらくだネ」

・や<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>都合の悪い時、困った時

「や<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>大変だごどになったしまったデ」

・や<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>さつさと、急いで

「や<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>やったらどんだ!」

・やうずり<sup>レ</sup>家を移り住む、引っ越し、

・やがましね<sup>レ</sup>やかましい、騒がしい、うるさい、いらぬことをいうな

「ずんぶやがましね飲んべえだナ」

・やず<sup>レ</sup>やつ(奴)、あいつ

・やくびと<sup>レ</sup>鯨場などでの役付きの人

・やさかぎ<sup>レ</sup>梓網から鯨を大きなたもでくみ上

げるときに使う、かぎ形になった木の棒

・やず<sup>レ</sup>やつ(奴)、あいつ、知っている仲間

内で使う

・やせうま<sup>レ</sup>(少ないが、少しだがという意味

で上げる)お年玉

・やち、やじ<sup>レ</sup>谷地、湿地、

古平では、埋め立てして出来た丸山町の一部

を「やじ」と呼んでいた

・やちぶき<sup>レ</sup>湿地によく生えているフキ

和名「エゾノリュウキンカ」

・やちわら、やじわら<sup>レ</sup>一面の湿地、

(前ページより続く)

スケソは今は、かまぼこの原料として主役になりましたし、もみじ子に次いで、グルメブームで夕チも高級な食材に様変わりしてしまいました。時代も変わったものです。

身の方も、味つけをして干したみりん干しなどという加工品もありましたが、さまざまに加工されて、珍味ならぬ珍味? として売られています。

浜育ちのわれわれとってみると、干したスケソを叩いてあのボサボサした淡泊な味わいこそが、食べる楽しみのひとつなのです。

蛸<sup>ㇿ</sup>出でて

気のゆるるされぬ万歩かな

蛸<sup>ㇿ</sup>よけの

白い軍手をはく万歩



—— 稲倉石の思い出 ——

山が怒り 川が襲った ②

## 全壊十六戸の惨事

⑨

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

救出された住民の看護は、頼みとする診療所が壊滅し、止むなく住民より家庭薬品の提供と一室を借り受け救護に当たった結果、間もなく回復したが、もう一人の道路除雪用ブルドーザーの運転手さん(外部の業者さんで全壊した社宅に仮住いしていた)の消息が遅々として確認されなかった。

崩壊した家屋を掘り起こし救出にあたったが、その行方が分からず、一時は下流に流されたのではとさえ懸念された。

ところが十一時頃、住民の願

いが実り、潰れた押し入れの折れ重なった柱や壁のわずかな隙間で、全身が泥雪に濡れ、冷えきった体には無数の傷と木片が突き刺さり、意識を失っている運転手さんを救出することができたのである。

一方、診療所に医師を派遣していた札幌医大では、早朝のテレビで鉄砲水の惨事を知り、稲倉石に電話をしたが不通で消息も分からず、急拠、医師と医療器具と薬品を載せ救急車を走らせたのだった。

札幌からサイレンを鳴らし続

け、安否を気づかないながら一路稲倉石に向かったが、折悪しく堤の沢を過ぎた山合いで雪崩があり、止むなく車を捨て五キロ余の山道を雪を掻き分けながら駆けつけてくれた。しかも、運転手さんを救出した直後に稲倉石に到着したのが幸いだった。

ただちに冷え切った体を暖かいタオルでマッサージし、懸命の処置を行った結果、一時間後に意識を回復し、生命を取り戻したのである。

生き埋め後、実に六時間後の奇跡であった。

かくして、真冬の稲倉石を恐怖のどん底に陥れた鉄砲水の災害は

- ・全 壊 一六戸
- ・半 壊 二戸
- ・床上浸水 一〇戸
- ・床下浸水 数十戸

という大きな爪跡を残し、泥に埋もれたテレビや飾ったばかりの雛人形が散乱し、高い木の枝には花模様の子供の晴れ着が痛々しく垂れ下がっていた。

稲倉石開山以来、未曾有の大災害を受けたが、人災ゼロの知

らせは住民にとってこの上ない安堵の知らせだった。

疲れ切った被災者は、隣人愛の温かい申し出によって復旧までの分宿が決まり、夕暮れとともに魔の一日が夢のように過ぎ去った。

これ程までに荒れ狂ったこの夜の空には、星が冷たくまたたき、全壊した家屋の彼方には北斗七星が大きく傾いていた。

翌二十四日。明るさを取り戻した住民は素早く復興に立ち上った。道路が狭く、軒先を重ねるように建てられた家屋の解体復旧は、ブルドーザーやショベルカーも入らず専ら海戦術にたよる以外になかったが、災害救助法の適用によって前夜半に到着した自衛隊のレンジャー部隊と、早朝に到着した一〇〇名を超す若く逞しい自衛隊員の力強い応援、そして住民の献身的な奉仕活動が大きな原動力となつて、わずか四日目には被災者の新人居先も決まり、住民の日常生活も回復することができたのである。

( つづく )

短歌

古平短歌教室詠草

亡き母にもらひし手紙紛失すそらんじし文に涙せし事のありにき	長	埼	フ	ユ
結婚式にはぜひ来てねと言ひ釧路の孫連休終り帰りて行きぬ	竹	内	コ	ト
川にそひ鯉のぼり数十泳ぐなり水の流れに影をうつして	池	田	テ	ル
新緑の中にひともと山桜遠くかすみてほんぼりの如し	田	中	香	苗
匂といふは竹の子だけの言葉となり季節を今朝は味噌汁に食む	堀	典	子	
丹精の花壇より芝桜垂れをりて職退きし人は静かに在ます	榊	佳	代	
やはらかき音して折るる笹竹の子夕べの雨にそこにもここにも	鈴	木	時	子
桜花散りて流るるせせらぎのほとりにしばし和みて佇てり	菅	原	節	子
玄関を出で入る度に活けおきし初咲きの水仙すがしく匂ふ	東	美	知	
雨後の滴草にきらめく中に摘む自生のみつ葉茎やはらなり	山	口	ス	エ
馬鈴薯掘りて孫のよろこびし日は遠し今日蒔くは老のたのしみにして	奥	山	き	よ
春まだき古平橋より燕らの元気に飛び来拍手をしたし	丹	後	初	江
咲きさかる桜の花の風に揺れ散りゆくを見るわが庭の内	金	杉	す	み





吉平ホトトギス会

一望館どの窓からも山若葉	吾が人生達磨と歩む去年今年	長椅子に寝てペランダの八重桜	お点前の指にのこりし独活の渋	逝きし娘の看取り疲れやおぼる月	風匂うアカシヤ並木徐行せる	祭山車数少なきは寂しくて	万緑の吊橋渡りきり卒寿	鮫鱈の腹より出でしものは何	法話聞く静寂破りし屋根雪崩	厳冬の遭難船に吠ゆる海	軒下の寒干しすけそ掛け足しぬ	早春の燦々と日矢波白し	雨脚の強きに木蓮わなわなと
斉藤波留	越野敏雄	越野スミ子	仲谷比呂子	大島喜恵	仲谷美砂	山口浪	水見句丈	岩瀬みのる	西島サツ子	外山俊久	中村樺宵	越野清治	山口悦子

大試験笑顔の見えてくる電話	春寒し悲しきことも伝へねば	春告ぐる名残の雪の降りにけり	倉敷の川面に浮ぶ花の屑	秋晴れの間近にしたる雄冬岬	あたらしいようふくおとうと一年生	にゆうがくのしるしをつけたカレンダー
福井幸平	大和田絵伊	仲谷安代	長谷川和子	斉藤睦子	小五水見翔人	小一水見玲央

川柳

菅さんの言葉じっくり考える	国会の答弁むなし外は雨	年上の俺が先だと医者通い	暖房費済めば税金出番です	朝の膳無言の亡夫と二人前
北政道		渡辺ハツエ		